

発明と必要の絶えざる連鎖

池内了 名古屋大学大学院理学研究科教授

これ以上忙しくなるのは厭だからと、家では電子メールもインターネットもやっていない。しかし、休日明けの月曜日に大学のメールボックスを開けると、100通ものメールが到着してウンザリする。それも、ほとんどが迷惑メール(正式にはUnsolicited Commercial E-mail 勝手に送られてくる商業用電子メール、UCEというらしい)で、バイアグラの売り込み、ユーロ売買のお勧め、お得なカートリッジの宣伝、ダイエット食品の広告、果てはナイジェリアからの資金の緊急避難の呼びかけと、ジャンクメールに悩まされている。迷惑メールの撃退法はないものだろうか。

およその概算では、1000万通の電子メールを出すと500万通は配信され、そのうち0.1%が開封されて応答が期待できるので、結局5000人の顧客が獲得できるのだそうである。電子メール配信業者が後を絶たないのもうなずけよう。他方、欧州委員会によると、迷惑メールのせいで全インターネット利用者が被る被害は、時間のロスと通信回線の混雑のために、100億ユーロ(約1兆3000億円)に達するという。これは2001年2月の見積もりだから、迷惑メールの数は年々倍々ゲームのように増えていることを考えれば、損害額は4倍に達しているかもしれない。膨大な損失の上に少数のネット業者が儲けているのである。

ところが、迷惑メール撃退法には有効なものがない。

まず、利用者やプロバイダーがジャンクメールを選別できるよう統一ラベルの表示を義務づける法律を整備することが考えられる。しかし、いったん配信業者が個人名で統一ラベルを獲得し、その後にジャンクメールを流し始めたらどうしようもない。また、私宛のジャンクメールはアメリカ発が多いから、全世界共通の統一ラベルが必要であり、それはとても無理である。

そこで、コンピューター利用者に、迷惑メールを受け取ったら確実に特定してデータベースに報告し、他の利用者にそのメールが配信されないようにすることが考えられる。スパムコップはマイクロソフト・アウトルック利用者を対象にこのサービスをおこなっている。コンピューター利用者が協力することが必要なのだが、いちいち通報する人がどれくらいいるだろうか。ならばと、迷

惑メール発見機能をもつソフトが開発された。スパムアサシンは、ウイルス対策ソフトと似て、「あなたはこの情報を受信する選ばれた人です」というような特定の言い回しが含まれているものを、自動的にジャンクメールとして削除する機能をもっている。配信業者は次々と言い回しを変えてくるだろうから、イタチごっこになること請け合いである。また、問題のない発信者のリストを作っておき、それ以外からの電子メールは発信元に問い合わせ、応答がなければ破棄するというサービスもある。しかし、不特定多数を相手にする企業には不向きだろう。せっかく送信してきた顧客にいちいち問い合わせするのだから、顧客の不興を買ってしまうからだ。

かつて、必要は発明の母であった。こんなものがあると良いね、こんなことができると良いね、という必要が発明を促したのだ。しかし、いったん発明がおこなわれると、今度は発明品が有効に使われる必要が出てくる。電子メールは文字情報の流通を手軽で簡便におこないたいという必要を母として発明されたが、この発明が迷惑メール撃退の必要を生じさせた。発明が必要の母となったのだ。そして、その必要から新たな発明が生まれる。そんな繰り返しの果てに、気がついてみればじつに異様な技術体系となっているかもしれない。ちょっと脇に身をおいて、発明と必要の連鎖を考え直してみることも大事なのではないだろうか。



イラスト=浅生ハルミン

いけうち・さとる

1944年兵庫県生まれ。京都大学大学院理学研究科博士課程修了。現在、名古屋大学大学院教授。宇宙物理学専攻。国際的な天文学者でありながら、文学や哲学など他の分野にも造詣が深く、著書も多数。近著に『物理学と神』(集英社新書)、『科学を読む楽しみ』(洋泉社新書)がある。